
夢世界 —インヴァギート—

馬超むむむ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢世界 ―インヴァギート―

【Nコード】

N8892Y

【作者名】

馬超むむむ

【あらすじ】

夢世界『インヴァギート』。そこは夢想者と呼ばれる者たちが眠りに落ちると行き着く謎に包まれた世界。

猥と呼ばれる化物が闊歩する世界で、夢想者たちは生き延びるために戦っていた――――

この作品は私のブログ「ライトノベル修業的ブログ」でも公開されています。最新話はブログのほうで公開されていて、修正をした後こ

ちらに投稿させていただきます。

1-1 インヴァギート（前書き）

今作はフィクションです。

今作の舞台は架空のものであり、実在の人物、団体、その他固有名
称で特定される全てのものとは、一切関係ありません。

1-1 インヴァギート

夢の世界。

ただ眠るだけで行ける世界。誰もが望んだその世界に一部の人々は足を踏み入れ、そして絶望に打ち拉がれた。

視界に広がるのは人類が絶滅した後のような情景。

都市には森林が入り混じり、英知の産物である建物は雑草や蔦に覆われ廃墟同然と化していた。アスファルトの地面には亀裂が走り一部の地面が露出している。

その荒廃とした都市の住人は人間ではない。

全長五メートルを優に超える『人間を主食とする』化物が我が物顔で闊歩し、夢の世界に足を踏み入れた餌を捕食する。

それがこの世界の有様。人間が望んで行き着いた先。人々はこの世界をこう呼んだ。

——『インヴァギート』と。

1

——ここは夢。

——死に至る夢の世界。

亀裂が入ったアスファルトの大地をブーツの靴底が叩く。黒のロングコートをなびかせる少女は、息絶え絶えに喘ぎつつも走り続けていた。

正真正銘の恐怖をもって、肌に纏わり付く汗を拭う暇すらなく。幾度目かの言葉が思考が巡る。

うるさい。

自分の心音がうるさい。自分の呼吸音がうるさい。自分の足音が

うるさい。

それほどまでの静寂がこの地にはあった。

荒廃した雰囲気逗留する地。

周囲には半ばほど地に埋もれ傾斜したビルや、原型の予想もつかぬ瓦礫が点在しており、賑わい以前に自分以外の人間すら皆無であった。

空は陰鬱とした雲が埋め尽くしており、その隙間から差し込むさやかな陽光の柱が、前方に見える城壁に囲まれた都市を照らしている。

それが唯一の希望。

あそこまで辿り着けば助かる。少女を殺す魔の手から逃れられる。ゆえに少女は走る。肉体はとうに限界を超え、精神は磨耗し、呼吸を整える余裕すらなく、しかし生きるために走り続ける。

この夢の世界、とても残酷な夢の世界で生き延びるために。

そんな少女の渴望を嘲笑うかのように、不意に背後から悪寒に襲われた。

彼女の肉体は意志を離れ、自動的に『振り返る』という行為を実行してしまう。

視線の先に化物が佇んでいた。

その全長は七メートルほど。

シルエットは人に酷似している。頭部があり顔があり頭髮があり四肢があり五本の指がある。だが、それは決して人と認めたくない雰囲気纏っていた。

顔には眼球二つと鋭く伸びた鼻梁、口もあり乱杭歯を覗かせている。だがそれで人を同じ外見とはいえず生理的に受け付けない。

唯一、それが人間と違う部分と言えば、肌の表面を覆う鱗と生えた巨大な尻尾。まるで人間が伝説上の生物であるドラゴンを目指した成れの果てといった具合だ。

化物はその爬虫類めいた眼球で少女を捉えたと、雄叫びを上げた。大気を震え上がらせる雄叫び。その震えは肉体に伝播し肉体を震

え上がらせ、意志に伝播し意志を震え上がらせる。

「あ、あ————」

何もかも震えていた。

屈服するしかなかった。

気付けば足は止まり、

ただ目を瞠って、

理解した。

ああ、

私、

死ぬんだ。

喰うモノは歓喜の咆吼を上げ、

喰われる者は死を受け入れる。

天敵。

目の前にいるのは間違いなく少女らの天敵である。

夢に住まう者たちを喰らうもの。

少女はその名を記憶に刻んでいた。

猯。

化物——猯は地を蹴りだし俺に向かって走り出してきた。

地が震動する。

硬直していた身体が跳ね上がり、少女の危機意識が蘇る。

（最後まで……抗えっ！）

拳を握り締め己を叱咤した少女は、真っ白になっていた思考を無理に再稼働させ考える。猯の走る速度からして目的地である都市まで逃げ切るのは——無理だろう。ならば決断すべきは一つ。

（仲間がいるの。私には一緒に笑い合いたい仲間がいる——！）

脳裏に浮かんだ仲間の笑顔が少女に武器を握らせた。

腰に添えられた柄。そこから少女の腕程度の長さがある剣を引き抜き、子供のような拙さで走り迫る猯へ煌く刀身に向けた。

何度も戦ってきた。

この天敵と。楽園に住まう絶望と。

少女は猿の目線まで跳躍すると、その恐怖を煽る人間と恐竜を混合したような顔に、剣戟を撃ち込む。

刃が鱗を切断し肉を抉る感触が柄から掌に伝わり、黒い液体が少女の頬に付着した。痛覚は人間よりも鈍感な猿だが、顔面を斬りつけられれば数瞬程度は呻き動きを止める。

無理な追撃は禁物だ。少女は着地すると同時に手近な瓦礫へ身を潜めた。

猿は特別嗅覚が強いわけじゃない。獲物の追跡はその視覚に頼りきりで、生物としての基本性能はそこの野犬などよりも遥かに劣る。ただその巨軀と身体能力を除いては。

いやそもそも生物として見ていいかさえ分からない。生殖器すら見当たらず繁殖行為も判然としない化物が、果たして生物の枠組みに収まるのだろうか――

恐怖を押しやるように、そんな現実逃避気味な思考を巡らせていると地が揺れた。猿が動き出したのだ。あの一撃を受けて足止めできたのは精々数秒というのが少女の僅かな闘志すらも打ち砕く。

（全く厄介な奴……！）

心中で虚勢全開の言葉を呟くが、指から伝達した震えは全身にまで達し、カツカツと奥歯が鳴り響く。

その音で気付かれないか、呼吸の音で猿に気付かれないか、心音で猿に気付かれないか、と思考回路はぐちゃぐちゃに掻き乱れ、再び精神を圧迫する恐怖が奥底から這い寄ってくる。

（いけ、どっかいけ………！！）

一步。また一步。猿が地を踏み締める度震動が少女を襲う。その度に心臓が跳ね上がり、全身が震え上がった。

不意に周期的な震動が訪れなくなった。

突然、空が暗くなる。

荒廃したこの世界は全体的に薄暗い場所が多いが、ここはこんな

にも暗かっただろうか。少女は恐怖に突き動かされ頭上を見上げた。

瞬間、こちらを見下ろす猯と目が合った。

呼吸が止まり、真っ直ぐ伸びてくる巨大な手を少女は見詰めていた。

猯の掌は少女の身体を軽々と掴んで、顔の間近までもってくる。

「……えっ？」

現象は理解できたが、何が起きたのかわからなかった。

猯の巨大な鱗の覆う手が人形でも掴むように少女の身体を握り締めている。万力にでも締め付けられるような激痛が襲い掛かり、肉体の端々からミシミシと奇怪音を上げ始めた。

現状を把握したのは、

口内が見えるほど猯の口が接近したのを見てから。

「そっ、か」

色々な感情が一斉に湧き起こり、少女は何とも言えない苦笑を浮かべた。

涙が頬を伝う。

ふと希望が満ちていた都市のほうへ目をやると、物凄い形相で何かを叫びながら駆けてくる人達の姿が見えた。

「あれさ、私の仲間なんだ」

少女の肌に落ちる巨大な影は徐々に近づいてきていたが、彼女は震える声で言い続ける。

「良い奴らなんだよ。だからお前には喰わせてあげない」

以前宴会中に決めた合図。少女は必死に自分を助けようと走る仲間たちへ向け素早く瞬きを三回した。これの意味は――

（逃げて）

少女は笑顔を浮かべ、その笑顔は一秒も経たずして喰われた。

――ここは夢。

——とても残酷な……夢の世界。

1-2 冷徹か激情かの選択（前書き）

今作はフィクションです。

今作の舞台は架空のものであり、実在の人物、団体、その他固有名
称で特定される全てのものとは、一切関係ありません。

1-2 冷徹か激情かの選択

「店長、もう一杯頼む」

「店長じゃない。マスターと呼びなさい」

汚れた木製カウンターの上に乗ったグラスを掲げたと同時に、店長——もといマスターである二〇代前後の女性は訂正の声を上げた。身に付けているのはTシャツに似た衣服と、エプロンに似た衣服、そして三角巾に似た装飾品、一見すれば思わず店長と呼ばたくなるラーメン店のおっさんみたいな格好だ。

対して俺の格好は黒を基調としたロングコート。別に好んで着ているわけではないが、目の前のラーメン店のおっさんみたいな格好をしている女性より奇抜ではない。

彼女は嘆息しながら、グラスに追加の液体を注ぎ「三杯目だよ」と言った。

「回復薬を飲んでいるだけで、そんな酔っ払いを対処するような顔で言わなくても……」

「大人の回復薬はお酒。つまりここで出しているのは回復薬でありお酒なんだよ。本当は十代そこのガキに飲ませたくないんだけどね」

はいはい、と俺は適当に相槌を打ち店内を見渡した。

木製の丸テーブルとそこに添えられた同じく木製の椅子が数脚見られ、全体的な印象としては西部劇に出てくる酒場を彷彿とさせるが、店前に悠然と鎮座するマスコットキャラは緑色のカエルだ。

カエル様の働きの見事にマイナス方面に働き、店内には俺以外に人がいない。

あのカエルを見ると何か幼稚なイメージがして、男たちは入りずらいんだよなあ……。かといって女の人にはこの野郎共が集まる酒場みたいな雰囲気は近寄り難いだろうし……。

「なに『あ、この店もう潰れるだろうな。新しい酒場を探しとくか』

みたいな顔してんだ」

「そこまで思っていないけどな……」

それに近いことは思考を巡っていたが。

「そもそもねえ、あんたがこの店に出入りする前までは……もうほんのちよっとだけ客の行き来があっただよ」

「ほんのちよっとねえ」

「あんたがきてからは、他のお客が怯えちゃって全く近寄らないんだよ！　ま、あんたが買ってくれるから売り上げ的には伸びてんだけどね！」

ほんのちよっと、がどれくらいを意味しているのかが窺い知れる。
「夢の世界でまで店の売り上げ心配するってのは疲れないか？」

俺が思わず訊ねてしまうと、マスターは鼻を鳴らし、
「夢の世界でまで化物と命の駆け引きしているあんたに言われたくないね」

「それもそうだな」

苦笑し、俺はグラスに注がれた回復薬を飲み干す。独特の苦味が口内に広がり、それを味わうことなく俺はカウンターに金を置き席を立った。

「忘れたのか？　一杯一〇〇〇ケロだよ。一杯分多い」

「いつも面倒になってる礼だよ。受け取ってくれ」

「毎度あり」

マスターの声を背に俺は店を出る。

入り組んだ路地を抜け石畳の通りに出ると、飛び交う野太いだみ声が耳に届いた。

現実世界で言うところの祭りのように露店が並んでおり、上は六〇代、下は十代まで老若男女の人々が声を張り上げていた。

この場面だけ切り取れば、多くの人が笑い栄えている夢の世界だと思い込むだろう。

事実、ここは人々が眠りに落ちた時に訪れることが可能な夢の世界なのだ。

眠ると同時にこの世界に目覚め暮らしてゆく俺たちは、人間という名を捨てイデアリスタ夢想者として生きている。

インヴァギート。

誰が名付けたかは知らないが、この夢の世界はそう呼称されている。

この世界ではあらゆる現実の建物は廃墟と成り果て、一部のモノ——信号や標札など——は壊廃。それ以外のモノは全て消滅し、そして猯という化物が闊歩している。

しかし唯一ここだけが猯という名の化物に遭遇しない安全地帯なのだ。理由は現在究明中であるが、とにかくにも猯はこの一帯に近寄ることはできず都市内の夢想者は襲われる心配もなく店を開いたりできる。

ならば都市内で不自由なく暮らしていけるかという答えは否だ。現実世界と違い汚れても時間が経てば自然と清潔な状態へと戻り、睡魔も襲ってくることはない。しかし耐え難い空腹は訪れるため、この世界の住人は自然と苦しまなくて済む金を必要とする。

俺がここに訪れたのは三年前。中学一年生になって一週間も経たぬ春だった。訳も判らず彷徨っていた俺は現実の知人と出会い、夢の世界——インヴァギートの説明を受けここでの生き方を学んだ。商人として他人と戦い稼ぐか、戦士として化物と戦い稼ぐか、何者にもならず乞食として耐え忍ぶか、その三択しかこの世界で生きる方法は存在しない。

他人との接し方も特別上手くなく、かと言って卑しく誰かに乞うことを良しとしない俺が選んだのは、戦士として化物と戦う道だ。今でもそれは過ちだとは思っていない。そう、俺は猯どもを必ず

「おい、その兄ちゃん。良い剣が入ったんだぜ、見てけよ」
露店が並ぶ道をぼーっと歩み進んでいた俺は、不意にそう呼び止められ視線を向ける。

ショーケースなんて存在しない。祭りの露店がマシに見えるみす

ぼらしい店に、現実では銃刀法違反間違いなしの銅剣が吊るされていた。……値段は二万と三〇〇〇ケロ。

この世界での通貨はケロだ。感覚的には単位が円からケロに変わった程度だが、こういった武具の類の相場はすぐに変動する。

俺は半目で店主である三〇代半ばと思われる親父を見た。

「ボツタクリか？」

「かっー兄ちゃん良い目してるねえ！」

俺の様子からボツタクリだと確信しているのを悟ったのか、親父は愛想良い笑みを浮かべる。

「そうだ、親父。これを買って取ってくれないか」

俺は背中に吊るしていた細身の剣を店主に手渡した。店主はしばらく刀身を見詰め、次に鰐、柄と移ってゆき、もう一度刀身を――今度はルーペのようなモノを使いじつと見定める。

「兄ちゃん、いくらがお望みだ？」

「あんたならあの銅剣、いくらで買い取る？」

質問を質問で返すと親父は渋い顔をして、

「本当のところを言うと、一万と少しかねえ」

「じゃ、ちゃんと表札を取り替えろよ。それとその剣の買い取りは銅剣と同じでいい」

「マジかよ兄ちゃん！ 太っ腹だねえ。三万でも惜しくなかったよこりゃあ」

そりゃ良かった。そう言い、俺は金銭を受け取って店を離れた。

丁度剣が荷物になって邪魔だったし。手ぶらのほうが身軽で良い。と俺が首をゴキゴキと鳴らしながら背を伸ばした瞬間、

「妙なところで太っ腹だね。ヒデオ」

横合いから放たれた呆れ声に、ヒデオこと俺は振り向いた。

そこに佇むのは女――に見えるほど線の細い、中性的どころか女性的な顔立ちの『少年』であるリュウだった。彼は俺と似たデザインの白を基調としたロングコートを身に纏い、肩で切り揃えた髪を微かになびかせながら、手に持った書類を突きつけてきた。

「ビデオ、集会サボっただろ。また僕が代わりに謝ったんだぞ」

「その文字いっぱい紙は？」

「今日の集会で出た議論をまとめておいたんだ」

律儀だなお前も。と俺が嘆息混じりに言うと、リュウは目尻を吊り上げ「だいたい……」と説教を始めた。どうやらリュウさんはお冠のようだ。俺は頭を掻きながら、

「あ……悪い。ああいう堅苦しいのはどうも苦手です」

「言い訳はいい！」

「……そのギャグ、結構いけるぞ。でも言い訳はいいわのほうがつと——」

「僕のこの顔がギャグ言ってるような顔に見えるなら眼科行ってこい——！」

全くもう、と腰に手をあて怒りと呆れをない交ぜにさせた溜息を吐くリュウ。

「僕とビデオに任務がきてるんだけど。明日行こう予定だから、いつもの店に行こう」

いつもの店とは、つい先ほど俺が出て行った緑色カエルがマスクットキャラの酒場のことだ。一度出た店に行き直すのは少し気が引け、

「ここで良いだろ。どうせ俺たちの話になんか誰も聞き耳なんか立てないさ」

生真面目なリュウは思案顔を浮かべるが、「時間も時間だからね」と了解の意を示した。

時間。不意に俺はこの都市で最も高く聳えている時計塔を見やると、時計と秒針は午前四時一〇分を示していた。普通の若者が起きているわけもない時間帯だ。

今現実の俺たちは眠っている。この世界は意識が途絶したさいにのみ行くことが可能で、現実の俺たちが覚醒すれば俺たちはこの世界から去らねばならない。

俺とリュウは高校生という身分なため、起床時間は必然的に決ま

ってくる。俺は七時起床なためあと俺がこの世界にいられるのは三時間のみということだ。

「あ、僕は今日用事があって五時半に起きるから。よろしくね」

俺が時計を見ていたことに気付いたのか、不意にリュウが言ってくる。

「俺と眠った時間は一時間も変わらないはずなのに、起床時間は一時間半も違うとはこれいかに」

「ヒデオがギリギリなだけだろ………って、とにかく時間がないんだからさっさと説明させてよ」

リュウの言葉に頷くが、さすがに道のと真ん中で話し込むわけにもいかず、俺たちは店と店の合間に生まれた路地へ入る。

一瞬だけ周囲の気配を探ったリュウが口を開いた。

「人型の猯が現れたらしいんだ……」

猯。の一言が出た時点で冗談でないことは理解できたが、その言葉の真意を測りかねた。

「どういう意味だ？」

人型の猯。

そんなもの『外』には腐るほどいる。

この夢都市は安全地帯だからこそ猯に襲われずに済んでいるが、ひとたび境界線を越えればあの人のシルエットをもった化物に遭遇する確率は生まれる。

「ああ、違うんだ。人型っていうより、人そのもの。全長が一メートル半程度の、女の子の外見をした猯が現れたらしい」

より意味がわからなくなった。

「それは猯じゃなくて、普通の女の子だろ。お前、大丈夫か？」

「うあーだから違うんだって」

リュウは煩わしそうに言葉を選びながら、丁寧に説明してくれた。最初の発見者——いや理解者はその少女に付き纏っていたストーリーの男性。

男はインヴァギートにいる間、ずっとくだんの少女に付き纏い監

視していたらしい。しかしある日、恐ろしくなって俺らが所属する義勇夢解析兵団に助けを乞いにきたのだ。

『あの女は人の姿をした猯だ！　だって——』

「ずっとインヴァギートに居続けているから」

リュウが男性の言葉を再現し、俺は思案した。

インヴァギートは夢の世界。

この世界に居続けられるのはあくまで『意識が途絶している間だけ』だ。意識の途絶には睡眠以外にも気絶が含まれるが、どちらも時間制限があるため永遠にインヴァギートに居続けるわけではない。

「何かしらの例外はあるかもしれない。けど……」

リュウは強張った表情で言った。

「猯なら……あいつらなら、あり得る。十二分に」

俺はそれに頷いた。

あの人型のシルエット。小型化すれば猿やゴリラよりも人間の姿に近い生物へとなるだろう。小型化し人間の姿をとる可能性は想定して当然。奴らはそれほどまでに、奇怪な行動や謎の生態を披露しているのだ。

そして最悪の事態を想定するのが俺たち義勇夢解析兵団の——いや夢想者の常識だ。

猯に喰われれば死ぬ。

これは既に証明されたことなのだ。

猯に喰われ目覚めた者は二度と眠ることができず、八時間以内に何らかの理由により死亡する。例えば事故で。例えば急病で。例えば通り魔にあつて。

千差万別な理由により——しかしインヴァギートで死亡したという共通点をもって、インヴァギートで死んだ夢想者は現実においても死亡する。

悪夢では終わらない。だから常に最悪の事態を想定し、自分の命を守らねば生き延びることはできない。それがこのインヴァギートの仕組みなのだから。

「その調査に行け、と。我らが義勇夢解析兵団の団長殿は仰ったわけか」

「その皮肉っぽい言い方、誰かに聞かれたらどうすんだよ」

情けない声で言うリュウを無視して、俺は独り路地から出た。

「ちょ、ちょっと待ってよヒデオ！ どこに行くんだよ！」

「その人型獏とやらを偵察しにな」

「この任務は明日で良いって最初に言わなかったっけ！？」

「これ、借りるぜ」

俺はリュウの胸元から拝借したくだんの人型獏の顔写真を見せ、制止の声を無視して跳躍した。

現実の世界では到底叶わぬ二〇メートル近い跳躍。背の低い建物ばかりしかないことから、視界を遮るものがなく眺めは最高だ。

だが外の世界を拝むにはこの程度では足りない。なぜならこの小規模な都市を五〇メートルに及ぶ無骨な壁が囲んでいるからだ。

あの城壁は獏の侵入を阻むものではない。獏がその気になればあの程度は破壊できるはずで、だから南側と北側に用意された門は常に開いているのだ。

あくまであの壁は目安であり最後の判断をさせるモノ。

この境界線を踏み越えれば死ぬ可能性があるぞ、と。

都市外へ出る者の覚悟を問う壁なのだ。

「……と」

刹那の滞空時間で流暢に見入っているわけにもいかず、俺は姿勢を正しながら手近な建物の屋根に着地。屋根上を歩いたりする行為は本来ならマナー違反で見つかったらお説教が飛んでくるが、今はこの夢都市の中心にある唯一高い尖塔——時計塔へ素早く行きたいので致し方ない。

幾つかの屋根を飛び移り、ようやく時計塔を見上げられる位置まで辿り着くと、俺はその灰色を基調とした年季の入った時計塔を仰ぎ、最後の跳躍をした。

時計塔の頂点まで無事到着し一息吐くと、俺は目を凝らして眼下

に広がる街並み、そこに行き交う人々の顔を見定めてゆく。

この安全地帯——夢都市に滞在する人数は二〇〇〇人ぐらいだろう。大して規模が広い夢都市ではなく、目を瞠るものと言えば優秀な武具店があることと義勇夢解析兵団の本部があることぐらいなのだが、

「そのわりに人は多いんだよな……」

インヴァギートは全国を網羅しておりその気になればこの世界で日本一周も可能ではある。安全地帯もここ一つというわけじゃなく、より規模の広い夢都市もあればより規模の狭い夢都市も存在する。

比べてしまえばここの夢都市は小規模のほうに部類されるが、安全地帯の面積にしては住人が多く活気に満ちていた。

「悪いことじゃないけど……うん、いないか」

ぼやきつつも屋外を歩く夢想者の顔を全員チェックした俺は、リユウが持っていた人型模疑惑の少女の写真を一瞥し、一致する顔いないことに肩を落とした。

そういやこの方法じゃ宿に泊まれてたら見つけれられないなーと己の作戦ミスに気付きつつも、希望的観測で都市外のほうへ目をやる。

視力は現実とは桁違いで、目を凝らせば数十キロ先に描かれている米粒みたいな絵の評価だって出来る自信がある。もちろんそんな馬鹿なことを試したことはないが——

そこで俺の思考を中断する戦慄が駆け巡った。

都市外南の方角。廃市街地の傾斜するビルを遮蔽物とし身を隠す人影が二つ。

それを探すように付近をうろつく全長一三メートル級の猯。

「——————っ!!」

気付けば俺は時計塔から跳躍し、宙へと身を投げ出していた。

ゴオオオオという風の低い唸りが鼓膜を震わし、俺は手近な屋根に猫の如く四肢で着地した。付近の路地をうろついていた男が、「おい何やってんだ!」と咎める口調で言ってきたが、

「悪い、それ貸してくれ」

路地に下り駆けると、男の背中に吊るされていた戦斧をすれ違わざまに奪い取り、俺は男の罵倒を背に走る。

通りを出て人込みの間隙を縫うように走り、屹立する南側の門前まで辿り着く。

圧倒的威圧感に一瞬俺は足を止め、

「……………いくぞ」

己の言葉に俺は頷き、観音開きの扉を潜り通った。

空気を切り替わる。

荒廃した胸の詰まる空気。都市内とは打って変わって周囲には殺風景が広がり、所々見える錆びた標札や折れた信号機、一枚の葉すらない枯れ木などは映画や漫画などのフィクションで見る『死んだ風景』のようだった。

身を竦ませる雰囲気振り払い、俺は亀裂の入ったアスファルトを蹴り出し疾駆する。

俺の脚力は現実のそれを遥かに上回っている。今の速度なら名馬と競争したって負ける気がしない程だ。あの程度の距離ならば——一分も経たずして辿り着いた。

いや遭遇したと言ったほうが適切だろう。

半ばで折れた廃マンションに手をかけぬっと姿を現したのは、先ほど目にした全長一三メートル程度の猯だ。

嫌に生物だということを強調するピンク色の歯肉と乱杭歯を覗かせ、唾液らしき粘液を口の端から垂れ流す化物。爬虫類のそれに酷似した眼球はギョロリと俺を捉え、嘲笑うように口角を吊り上げた。そのかつて見たような表情に、血液が沸騰するような『怒り』が俺の底から湧きあがる反面、肉体を離れ先鋭化した意識は冷静に猯の動きを捉え続ける。

猯は子供が人形を乱暴に引っ掴もうとするように、屈みながらその巨大な掌で俺を捕らえようとした。しかし俺は横っ飛びにそれを躲し、見ず知らずの男が『貸してくれた』戦斧で猯の手首に一閃を

放つ。

膨大な赤黒い鮮血が地を染め、猯は大気を震わす絶叫を上げると膝から崩れ落ちる。

猯の急所は人間と同じ箇所が多数存在する。はなはだ本意ではあるが猯と人間は似通っていることを認め、崩れ落ち膝立ちの姿勢でいる猯の肩に乗り、人間でいう頸動脈の部分に戦斧の煌く刃を走らせる。

ホースから噴射される水のように黒い液体が噴き出る。これが猯の血液、黒血である。

猯は絶叫を放ちながらも、一撃で人間の肉体を拉げさせる巨木のような腕を無茶苦茶に振るい、肩に乗る俺を追い払ってきた。

俺は肩から地に着地すると同時に膝を屈め、屈伸の要領で猯の視線まで跳躍する。

猯と目があった。一瞬だけ恐怖の色がその爬虫類染みた眼球に走ったような気がして、

今度は俺が口角を吊り上げながら戦斧を構え、その眉間に全力の一撃を叩き込む。

黒色の鮮血が薄暗い宙に煌く。

俺が右足で着地した直後、猯が仰向けに倒れ伏す震動と轟音が大地を震わした。

俺が更なる追撃を加えようと柄を握り直すと、猯は気化するように朽ち消滅を始める。

俺は首を捻った。猯がこの程度で死ぬはずがない、既に手負いだっただのか……？

思い浮かぶのはあのとき見えた二つの人影。おそらく善戦はしたが殺すまでに至らず逃走を決意した、というあたりだろう。

「さてと」

呟き、骨も残らず死滅した後に残ったもの――硬貨と細身の剣を拾った。他にも防具や衣服が落ちていたが、それは使いものになりそうにないので放置しておく。

インヴァギートはまるでRPGの世界のようだ。とかつて共に戦った友人は言っていた。

人々が栄える都市に化物は出現せず、魔法的異能の力も存在する。化物を倒せば金や道具が手に入り、そこらを歩けば金が落ちていることで当然のようにあるくらいだ。

だがそれは決してプログラムじゃない。

獺は人間以外を消化する器官がないのか、はたまた消化する器官自体ないのか、夢想者たちを捕食したはいいがその捕食した夢想者たちが装備していたものは内部に残るらしく、一定以上溜まるとそれを吐き出す。

獺が死滅した後に残った装備品らは喰われた夢想者のものであり、そこらに落ちている装備品や金も獺が喰って残留したものを嘔吐したに過ぎない。

剣と魔法の世界とは、誰もが一度は望んだ夢の世界はこんなにも残酷だった。

「それを拾って生活の足しにする俺も残酷なんだろうな……」

そう呟いて自嘲気味に俺は笑い、意識を切り替え右斜め前方にある瓦礫に感じる気配二つに声をかけた。

「変に逃げずに息を潜めていたのは正解だったな」

俺の言葉に応えるように、瓦礫の影から姿を現したのは一人の少女。俺はその姿を見て反射的に剣の柄を強く握り締めた。

印象的なのは長い睫毛に縁取られた気丈そうな――そのわりにくりくりっとしている――瞳と、肩甲骨辺りまで伸びる色素のない半透明な髪。そして装飾品の少ないこの世界では珍しい帽子だ。

服装は典型的な女性軽装備であるジャケットとミニスカート（当然下にはスパッツみたいなものを着用している）で、そこから伸びる四肢は細く肌は冗談のように白い。

年齢的に俺と大差ないだろう。もちろん彼女が同じ人間、夢想者であればの話だが。

その外見はリュウから拝借した写真に写るくだんの人型獺そのま

まだった。ストーカーができたことも頷ける美麗な容姿だ、見間違
いということもない。

「助けてくれてありがとう、『無剣の剣師』」

俺の警戒心を察したのか、交友的とは言い難い棘のある口調で彼
女は言ってきた。

彼女は視線を俺から瓦礫のほうへ移す。

確かもう一人いたはずだ。まだ怯えて出てこれないのだろう。俺
はそちらへ歩み寄り、瓦礫のほうに回り込んだ。

見れば蹲り震える女性。こちらは俺よりも年上っぽいジャケット
に鎧を纏った女性だ。彼女は完全に戦意を喪失し、垣間見えた瞳は
虚ろだった。

そしてぼつりと、

「返してよ」

「……」

その言葉が聞こえなかったはずはないだろう。よせばいいのに、
人型模疑惑の少女は震えるもう一人の女性の肩に手を置き「もう大
丈夫」と言いかけ――

パシッ、と軽い音とともに弾かれた。

「知ってるんだから！ あんたも猥なんでしょっ、返してよ……彼
を……！」

俺は我が耳を疑った。

「おい。こいつが猥だって、何で思うんだ」

怒りに顔を歪めた少女は俺のほうへ振り向き、

「彼から聞いたのよ。人型の猥がいるって、都市内も安全じゃない
って。私を連れて逃げ出そうとしてくれたのに……」

都市外へ無防備に出て猥に襲われ、そこを何らかの理由により猥
疑惑少女が助けたということか。俺は模疑惑少女のほうへチラリと
視線をやるが、彼女はきつく口を結び拳を握り締め己の侮辱に文句
一つ返さず耐え忍んでいる。

その『彼』とやら義勇夢解析兵団の未確認情報をどこで入手した

のかは知らないが、どうやら流暢に詰問している暇はないようだ。猥が遠くから歩いてくる微震動を感じた俺は、泣きじゃくる女性の腕を掴み強引に立ち上がらせた。

「話しは都市で聞く。いくぞ」

俺は身を翻し一步を歩み出した瞬間、女性が腕に縋り付いてきた。

「その服、義勇夢解析兵団なんでしょ。ならこの化物を殺してよ！ さっきみたいに殺してってば！ こいつはあいつらの仲間なのよ！」

ヒステリックな金切り声を放つ彼女を一瞥して、

「話しは都市に着いてから聞くと云っただろ。移動中に無駄口一つ叩いたら、お前はそこで置き去りにする。『彼』と同じ目に遭いたくないなら黙っていることだな」

彼女の言う彼がどんな目に遭ったのかは想像がつく。俺だって何度も目にしてきた。猥の巨大な手に握られながら、その乱杭歯で噛み千切られ租借されるその瞬間を。

この世界は残酷だ。

誰もが笑っていられる夢の世界じゃない。

だから非情じゃなきゃ、残酷じゃなきゃ、生き延びることはできない。

嫌気が差すぐらいに冷徹な思考を巡らしている俺は、更に嫌悪感に陥ることも厭わず涙を流す彼女へ言った。

「死にたくないなら冷徹でいろ。生きる道だけを見据えるんだ」

俺は沈黙で応える二人を引き連れ、都市へと引き返した。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8892y/>

夢世界 —インヴァギートー

2011年11月27日19時48分発行